

交野市文化財調査概要

平成 4 年度

交野市埋蔵文化財発掘調査概要

1993. 3

交野市教育委員会

目 次

例 言

第1章 埋蔵文化財発掘調査の状況.....	1
第2章 発掘調査報告.....	1
第1節 森遺跡.....	1
第2節 交野郡衙跡遺跡.....	9
第3節 私部城遺跡.....	12
第4節 神宮寺遺跡.....	14
第5節 馬場遺跡.....	16

挿 図

第1図 森遺跡調査地位置図.....	2
第2図 森遺跡(1)掘削位置図.....	3
第3図 森遺跡(2)掘削位置図.....	3
第4図 森遺跡(3)掘削位置図.....	4
第5図 森遺跡(4)掘削位置図.....	4
第6図 森遺跡(5)掘削位置図.....	5
第7図 森遺跡(6)掘削位置図及び遺構配置図.....	6
第8図 森遺跡(6)掘削トレンチ断面図.....	6
第9図 森遺跡(7)掘削位置図.....	7
第10図 森遺跡(7)掘削トレンチ断面図及び平面図.....	8
第11図 交野郡衙跡遺跡調査地位置図.....	9
第12図 交野郡衙跡遺跡(1)掘削位置図.....	10
第13図 交野郡衙跡遺跡(2)掘削位置図.....	10
第14図 交野郡衙跡遺跡(3)掘削位置図.....	11
第15図 私部城遺跡調査地位置図.....	12
第16図 私部城遺跡掘削位置図.....	13
第17図 神宮寺遺跡調査地位置図.....	14
第18図 神宮寺遺跡掘削位置図.....	15
第19図 馬場遺跡調査地位置図.....	16
第20図 馬場遺跡掘削位置図.....	17

例　　言

1. 本書は、交野市教育委員会が、平成4年度国庫補助事業として実施した交野市内における埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、交野市教育委員会の社会教育課が担当した。
3. 本書で使用したレベル高はすべて海拔絶対高で、方位は磁北方位である。また土色及び土器の色調は、「新版標準土色帳」（農林省農林水産技術会事務局発行）によった。

第1章 埋蔵文化財発掘調査の状況

交野市教育委員会では、平成4年5月27日から平成5年2月26日に至る間、13件の補助事業にかかる発掘調査を実施した。

今年度、調査の対象となった遺跡は森遺跡7ヶ所、交野郡衙跡遺跡3ヶ所、私部城遺跡、神宮寺遺跡、馬場遺跡が各1ヶ所である。遺跡ごとに概要を述べていく。

第2章 発掘調査報告

第1節 森遺跡

I 遺跡の概要

森遺跡は、交野市森北及び南地区に所在する。森遺跡の範囲は地区のほぼ全域に及んでいる。遺跡の位置するところは、生駒山系から西側にのびた尾根の先端から天野川右岸の沖堆平野部までの標高30~50mの台地上の傾斜地である。現在、線路敷によって視界を妨げられているが、かつては平野部を一望できる見晴らしのよい場所であった。

遺跡については、昭和30年頃からその存在が知られていたが、本格的な調査の手が加えられたのは、昭和61年にJR学研都市線の南側に平行して実施された市道建設予定地の調査による。

これまでの調査により、古墳時代を中心とする住居址をはじめ土器や木器などの遺物が多量に出土した。特筆すべきこととしては、古墳時代において森遺跡で鍛冶操業が盛んに行われていたことである。これまで鍛冶操業の過程にてできる鉄滓をはじめ、鍛冶に関連したフイゴ羽口、砥石などの遺物の他鍛冶炉遺構が検出されている。鍛冶操業が行われていた時期は共伴する須恵器などから5世紀後半から7世紀初頭の長期にわたるもので、当時の森遺跡が古墳時代の鍛冶専業集落であったと位置づけられており、今後市内における注目すべき遺跡のひとつである。

このように、鍛冶操業が盛んに行われた森遺跡も中世に入る頃までに大部分が耕地となって、現在に至っている。

II 調査結果



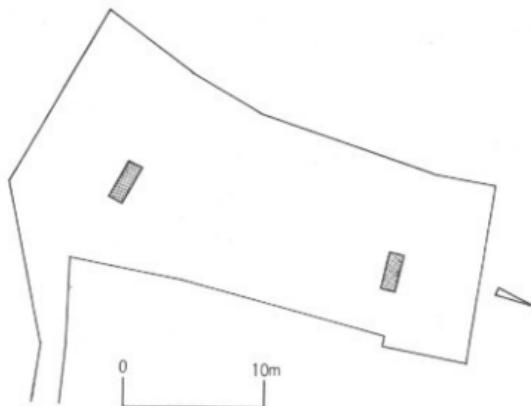
第1図 森遺跡調査地位置図

(1)森南2丁目95

調査地の南側と北側に2ヶ所の試掘トレンチを設定し調査を行う。第1トレンチでは、地表下80cmの地山と推定される淡黄色シルト層に達する間に5層の土層が確認された。遺物としては近世の茶碗の破片が出土したのみで、遺構は確認できなかった。

第2トレンチでは、地形の関係から地表下40cm足らずで地山となった。調査地西側部分で土塁が確認されたが遺物が全く出土しなかつたため詳細については不明である。

今回の調査では出土遺物が僅かであることから断定はできないが、この位置に住居が存在するようになったのは近世以降と推定される。



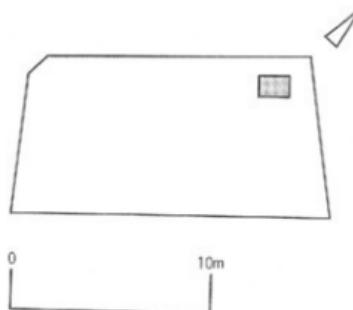
第2図 森遺跡(1)掘削位置図

(2)森南1丁目250-8

調査地南側に $1.5m \times 1.2m$ の調査トレンチを設定し調査を行う。地表下1mまで掘り下げる。層序は、6層にて形成されており、地表下50cmの明褐灰色の小石まじりの第3層以下の層より土師器片が出土したが、第6層（地表下80cm以下）では遺物を検出できなかった。

今回の調査で耕作土層（第2層）より下層は、青灰色系の土層が堆積することが確認された。これは東側を接して流れている水路の影響であると認められる。

のことから、この水路が、並行して走る森地区の他の水路と同様に近世以前から存在したことが推定される。



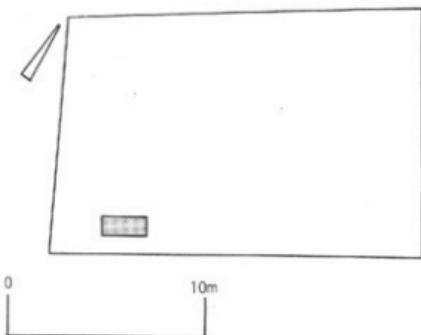
第3図 森遺跡(2)掘削位置図

(3) 私市1丁目1117-1

調査地の南側に2.3m×1.0mの試掘トレンチを設定し調査を行った。

地表下80cmまで掘り下げる。地表下60cmで水路を狭んで東側調査地と同様の黒色土層を検出した。遺物、遺構は検出されなかった。

層序から推察する限り、第2層以下は、旧耕作土層と見られる。

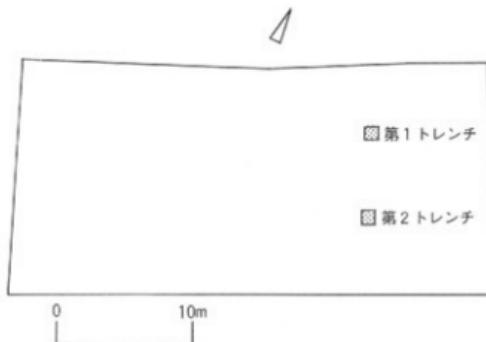


第4図 森遺跡(3)掘削位置図

(4) 森南1丁目214-1

調査地の西側に1m四方の試掘トレンチを2本設定し調査を行った。

地表下60cmで古墳時代の遺物包含層である黒色粘質土層の堆積が確認された。同調査地については、過去における隣地の調査結果から、同地に遺跡が存在することは確実であったが、今回の工事が、遺跡に支障がないために試掘のみにとどめた。

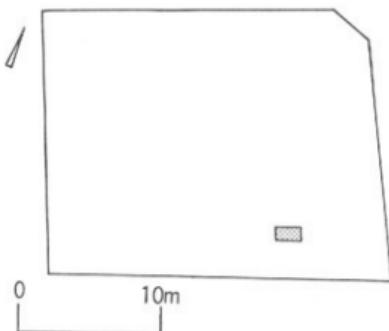


第5図 森遺跡(4)掘削位置図

(5) 森南1丁目246-1

調査地の南側に2.0m×1.0mの試掘トレンチを設定し調査を行った。

地表下約60cmのところで古墳時代の遺物包含層である黒色粘質土層の堆積が確認された。また地表下約1.0mのところで褐灰色の森遺跡特有の洪水層を確認した。遺物・遺構は確認できなかった。



第6図 森遺跡(5)掘削位置図

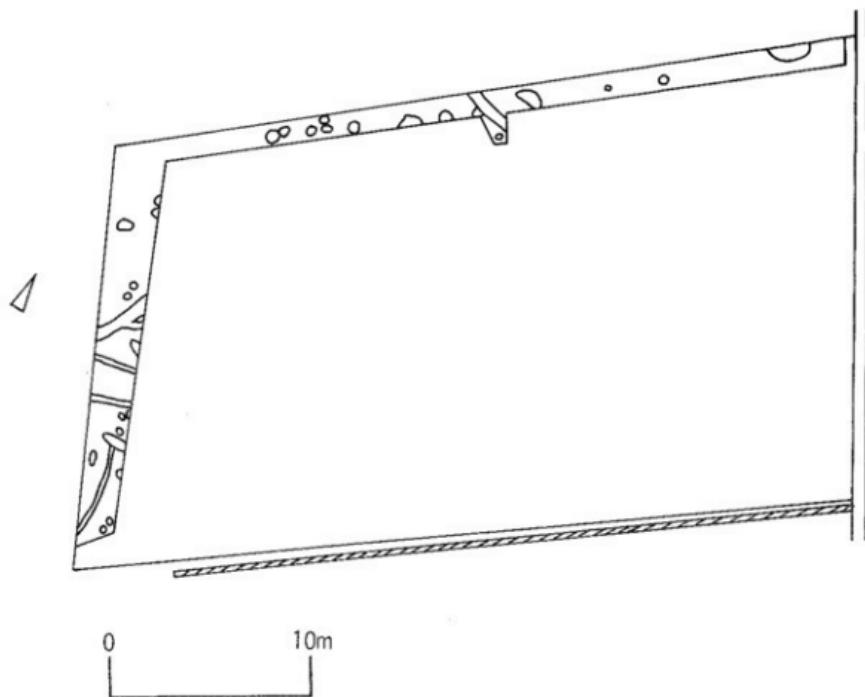
(6) 森南1丁目404-1

調査地の北側及び西側部分にそれぞれ36.0m×1.0mと20.0m×2.0mのトレンチを設定し調査を行った。

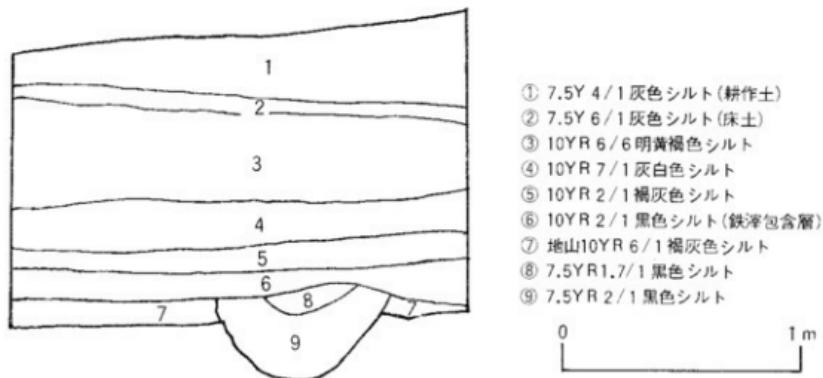
調査の結果、同調査地における層序は、これまでの森遺跡で確認した層と基本的に変化はなく、第1層の現在の耕作地（近世以降）の下層に中世の耕作層が続き、その下層に淡黄色又は褐灰色の洪水層の堆積が見られ、その上面に古墳・弥生時代の遺構面が形成されていた。

遺構については、西側トレンチ部分で、古墳時代の須恵器及び土師器片を出土したが、出土した遺物が小片でかつ少量であったため、遺構の明確な時期を決めるには至らなかった。尚、中世の鋤溝跡より弥生時代中期のミニチュアの磨製石斧を出土した。

又、北側トレンチでは、中央部の溝状遺構中より、古墳時代後半以降の須恵器・土師器片と共に鉄滓やフイゴ羽口が多量に出土した。同じくトレンチ中央部の土塙からは良好な須恵器の一括資料を得た。



第7図 森遺跡(6) 挖削位置図及び遺構配置図



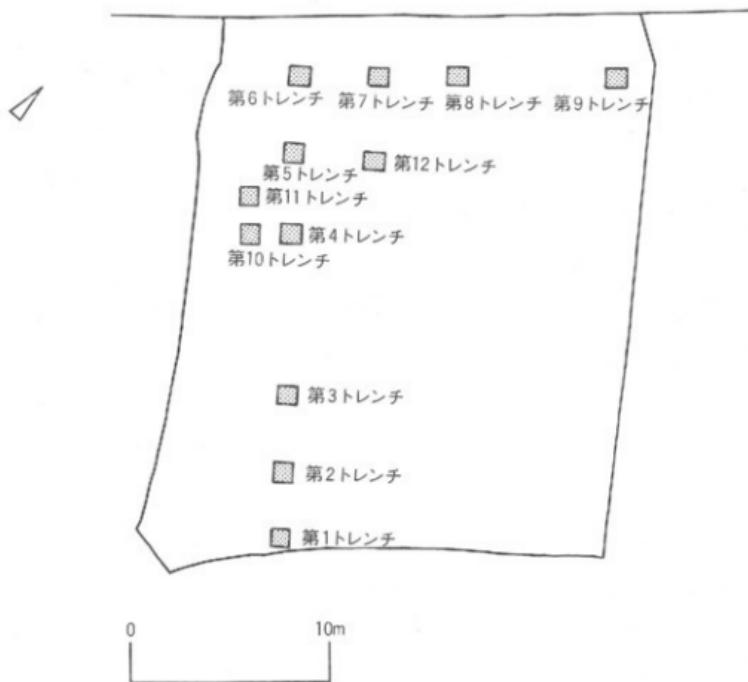
第8図 森遺跡(6) 挖削トレンチ断面図

(7) 森南1丁目289、293-1

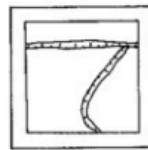
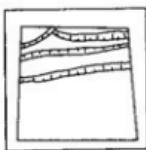
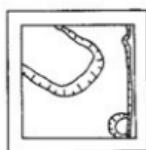
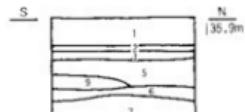
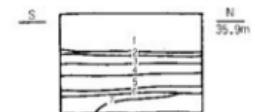
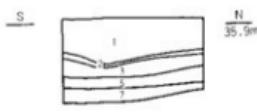
調査地内の北側及び西側部分に1.0m四方の試掘トレンチを12ヶ所設定し、調査を行う。

調査の結果、西側部分の第4・5・6トレンチで地表下80cmから100cmの間に古墳時代の遺物包含層である黒褐色シルト層(第8層)が確認された。又北側の第8・9トレンチにおいても同様な層序が確認された。

出土遺物としては、須恵器・土師器をはじめ近世の磁器を出土した他、第6トレンチの古墳時代の遺構から鉄滓を1点検出した。又、遺構としては、中世の鋤溝跡と古墳時代の溝及び柱穴を検出した。



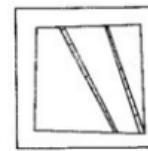
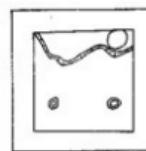
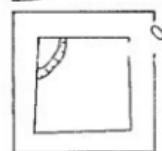
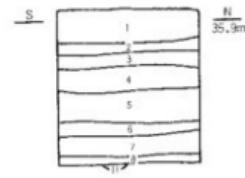
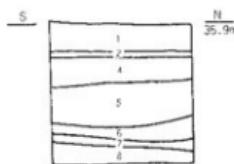
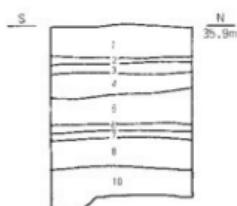
第9図 森遺跡(7)掘削位置図



第1 トレンチ断面図(上)、平面図(下)

第2 トレンチ断面図(上)、平面図(下)

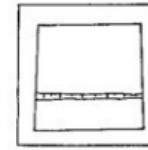
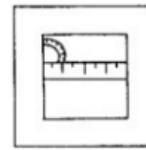
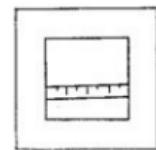
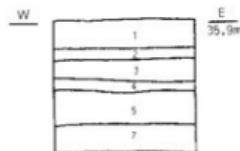
第3 トレンチ断面図(上)、平面図(下)



第4 トレンチ断面図(上)、平面図(下)

第5 トレンチ断面図(上)、平面図(下)

第6 トレンチ断面図(上)、平面図(下)



第7 トレンチ断面図(上)、平面図(下)

第8 トレンチ断面図(上)、平面図(下)

第9 トレンチ断面図(上)、平面図(下)

- ① 10YR 3 / 1 黒褐色シルト
- ② 10YR 5 / 1 灰色シルト
- ③ 10YR 6 / 6 明黄褐色シルト
- ④ 10YR 6 / 2 灰黄褐色シルト
- ⑤ 10YR 7 / 1 灰白色シルト
- ⑥ 10YR 4 / 6 暗褐色シルト
- ⑦ 10YR 6 / 3 にぶい黄橙色シルト
- ⑧ 10YR 3 / 1 黑褐色シルト
- ⑨ 10YR 5 / 4 にぶい黄橙色シルト
- ⑩ 10YR 1.7 / 1 黑色シルト
- ⑪ 10YR 2 / 2 黑褐色シルト



第10図 森遺跡(7)掘削トレンチ断面図及び平面図

第2節 交野郡衙跡遺跡

I 遺跡の概要

平安時代の小松寺縁起には津田から星田にかけての山々を三宅山と記している。延喜式に交野郡三宅郷とある地域は同一の地域を示しているものと見られる。

このようなことから、「北河内史蹟史話」の著者である平尾兵吾氏は、日本書紀の仁徳紀13年9月条に記された茨田屯倉を「くらやま」などの地名が残る郡津の地域にあったと推定している。しかし現在に至るまでその存在については不明である。

昭和50年以来、交野郡衙跡遺跡確認調査が実施されているが、全体的に発掘調査の事例が乏しくその存否については将来を待たなければならない。しかし、郡津小学校の東側で堀立柱建物に伴なうと思われる柱穴や、同遺跡内の幾野2丁目内の下水道工事の際にも、倉庫跡と推定される柱穴群が検出されている。又、この他にも出土した遺物の中に、これまで郡津地域において存在が確認されていない古墳時代中期のハニワ片が検出されており、かつては天野川を利用した「郡」の「津」が、この郡津地域に存在したことが推定されている。

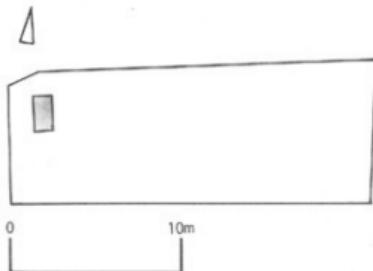
II 調査結果



第11図 交野郡衙跡遺跡調査地位置図

(1) 郡津5丁目1049-1

調査地の西側に2.0m×1.0mの試掘トレンチを設定し調査を行う。地表下90cmまで掘り下げる。結果、表土層とその下層は、以前に建っていた住宅を建築する際に運ばれてきた盛土にて形成されており、地表下80cm程のところに、この地域特有の黄橙色のシルト層が存在していた。遺物・遺構は確認できなかった。

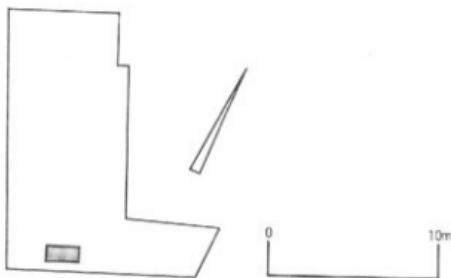


第12図 文野郡衛跡遺跡(1)掘削位置図

(2) 郡津1丁目294・295・394

調査区の南側に2.0m×1.2mの試掘トレンチを設定し、地表下80cmまで掘り下げたところ、(1)地区と同様の黄橙色のシルト層を確認した。

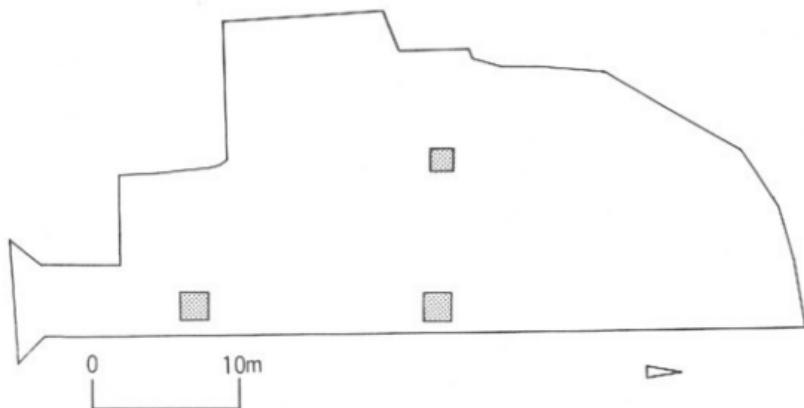
この調査地の付近では数ヶ所にて遺構・遺物が確認されており、今回の調査で黄橙色のシルト層の上面に遺構が発見されるものと思われたが、調査の結果では遺物・遺構は全く検出されず、又工事そのものが遺跡に支障がないことから試掘のみの調査にとどめた。



第13図 文野郡衛跡遺跡(2) 掘削位置図

(3) 郡津1丁目334-1、335-1、340-1

調査地の南側に2.0m×1.2mの試掘トレンチを3ヶ所設定し調査を行った。調査の結果、地表下80cmで黄橙色のシルト層が堆積していた。遺物・遺構は検出しなかった。



第14図 文野郡衝跡遺跡(3)掘削位置図

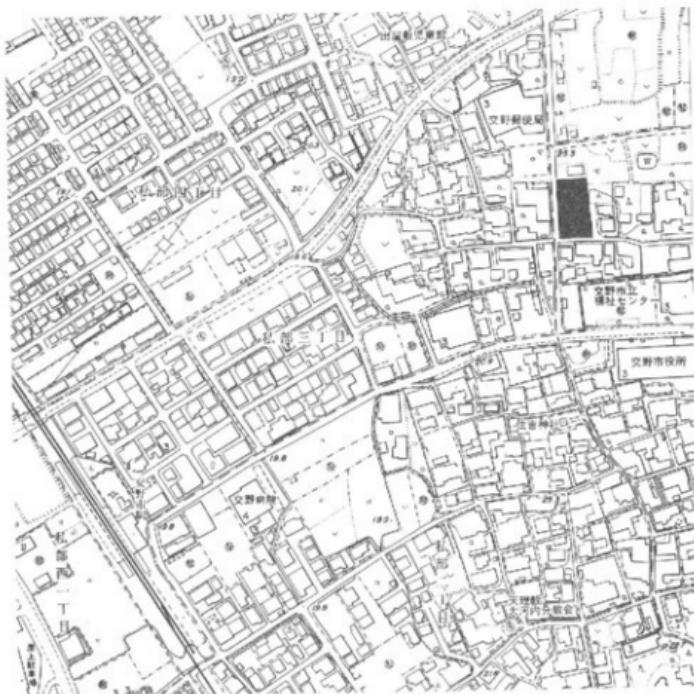
第3節 私部城遺跡

I 遺跡の概要

交野市私部6丁目に所在する私部城跡は、南北朝時代のはじめ頃に築かれたとされる安見家の居城であった。戦国時代に入ると、城は最盛期を迎えるが、その時の城主であった安見直政が、元亀元年(1570)織田信長の石山本願寺攻めに参加し、その時の傷がもとで、城内で病死をする。その後は城の勢力は急激に衰退し天正元年(1573)、私部城は、大和の筒井氏によって落城する。

現在、城城とされるところは南北約200メートル東西約250メートルに及ぶ範囲で、この部分には本郭、天守、三郭と呼ばれる土壘跡と切り通しや堀跡である池が存在する。このように私部城跡は、平城としては全国的に保存状態の良好な城跡である。

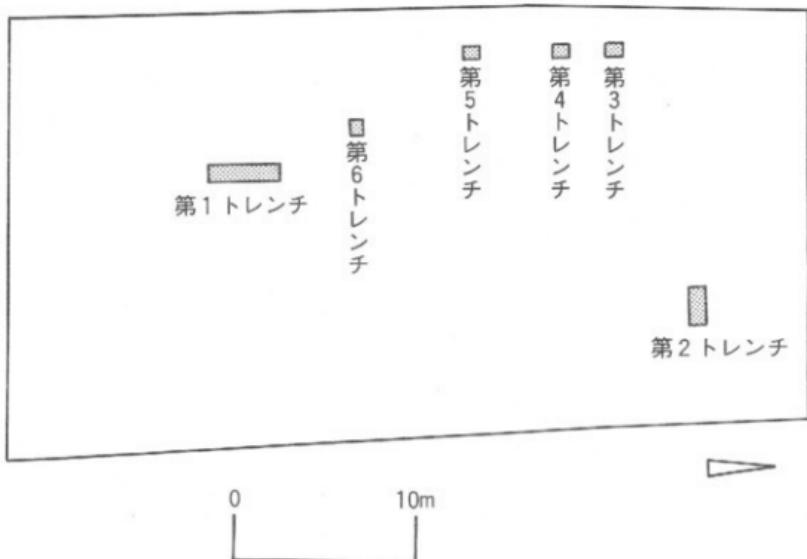
II 調査結果



第15図 私部城遺跡調査位置図

(1) 私部 5 丁目2984

調査地内の 6 地点にトレンチを設定し、試掘調査を行った。調査の結果、南側の第 1 トレンチでは、表土下は旧耕作層となっており、その床土（第 3 層）の下層は、砂層にて形成されていた。この部分を地表下1.05mまで掘削したが遺物、遺構は検出されなかった。次に調査を行った北側の第 2 トレンチでは表土下は第 1 トレンチとは異質の堆積層にて形成されていた。これにより、この両トレンチ間には土壘とそれに伴う壕の存在したことが推定される。続いて、その確認のために、さらに両トレンチ間の 4 地点（第 3 ~ 6 トレンチ）に試掘トレンチを設定し、地表下0.5mまで試掘を行ったが、後世の盛土部分が厚く堆積しており、土壘及び壕跡を確認することはできなかつた。



第16図 私部城遺跡掘削位置図

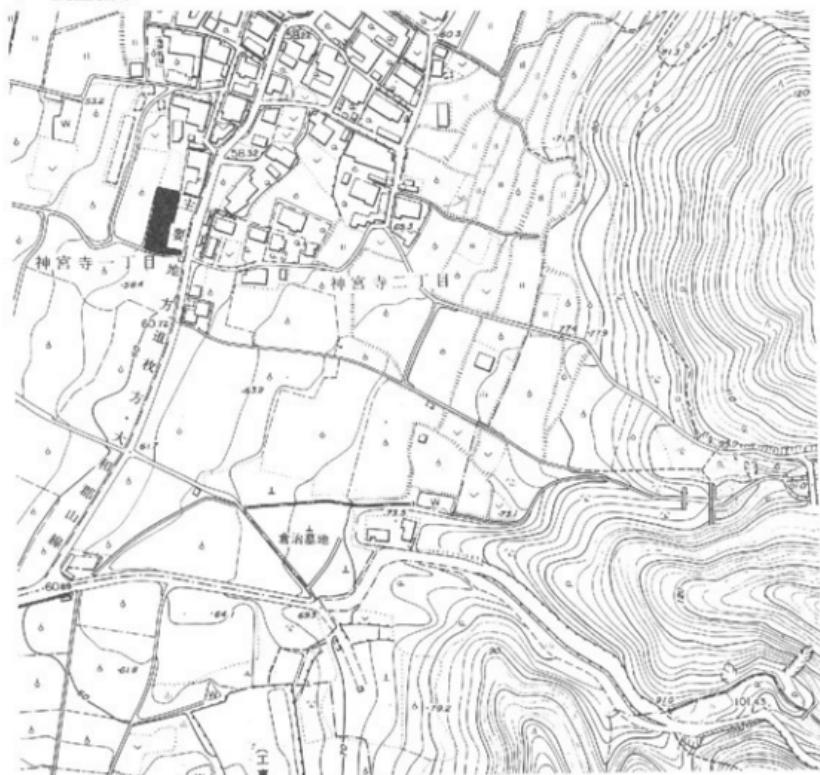
第4節 神宮寺遺跡

I 遺跡の概要

縄文時代早期の押型文土器が出土することで有名な神宮寺遺跡は、標高344mの交野山から西北へのびた尾根が標高100mに至って、それまでの急斜面から緩斜面に変換する、その変換点に生じたやや幅ひろい台地上を占めて営まれている。遺跡の西側に沿って走るJR学研都市線の以西は標高25~40m前後であることから神宮寺遺跡は極めて眺望のきく高地の遺跡であるといえる。

昭和32年から現在に至るまでに行われた発掘調査の結果、縄文時代早期における集落の領域は、南側の尾根、北側の関西電力株式会社枚方変電所ののる尾根の間、南北500mと東は傾斜変換線から現在の神宮寺の集落東縁までの東西300mの範囲であったと推定されている。

II 調査結果



第17図 神宮寺遺跡調査地位置図

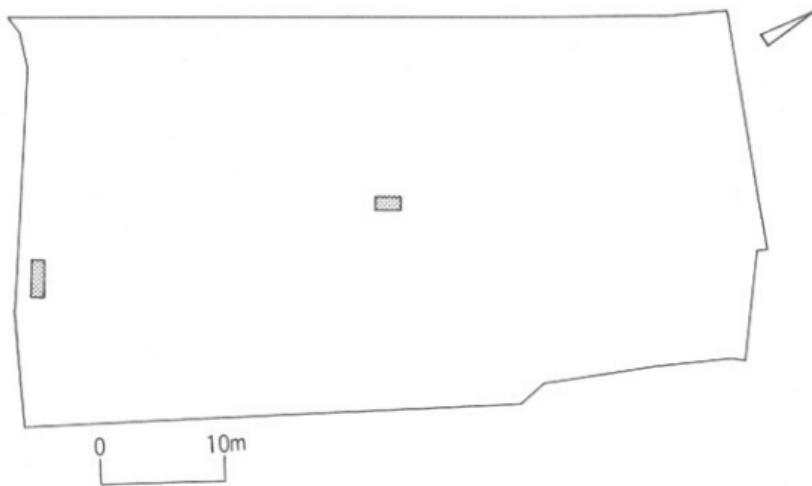
(1) 神宮寺1丁目295他5筆

調査地の南端部分に $1\text{m} \times 3\text{m}$ のトレンチと中央部分に $1\text{m} \times 2\text{m}$ の2箇所のトレンチを設定し調査を行った。

第1トレンチでは、表土下20cmまでが第1層の耕作土層で、その下層は第5層の黒色土層を狭んで地表下90cmまでに7層の褐色系の土層が堆積していた。土層の堆積状況から判断すると、第4～9層が地形に対応して自然堆積しているのに対して第2・3層は盛土層であった。

第2トレンチにおいても、ほぼ同様の層序で、遺物・遺構は確認されなかった。

今回の調査で、耕土の下は、これまでの調査と同様、扇状地特有の砂層が堆積するものと予想していたが、少々異なった土層の堆積（地表下1m以内）が確認された。神宮寺の全体的な地形から推測して、さらに深い部分では同様な堆積にて形成されているものと推定される。



第18図 神宮寺遺跡掘削位置図

第5節 馬場遺跡

I 遺跡の概要

馬場遺跡は、私市4丁目に所在する。遺跡は、生駒山系より派生した尾根筋上の西端部分に位置し、遺跡のほぼ東縁を京阪電鉄交野線が通る。標高は40~50m程で北側部分では約10m程の比較がある。

遺跡については、これまで本格的な調査が一度も実施されていないことから遺跡の詳細については不明であるが、天田神社遺跡や森遺跡に近接していることから、それらと同時期の遺跡であろうと推定される。

II 調査結果



第19図 馬堀遺跡調査地位置図

私市 6 丁目 374-1

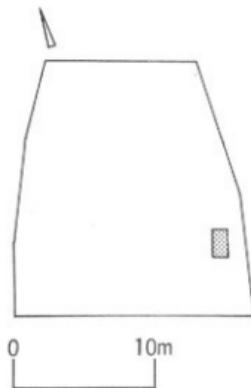
調査地の東側に 2m × 1m と西側に 1m × 1m のトレンチを設定し調査を行った。

第 1 トレンチでは 20cm 程の耕作土層の下は、4cm 程の灰色土層が堆積しており、その下層は地山と推定される黄橙色の粘土層が続いていた。

遺構については確認できなかったが第 2 層及び第 3 層上部より中世の瓦器片並びに近世の茶碗の破片が出土した。尚、第 3 層には木炭が混じっていた。

第 2 トレンチでは、地表下 50cm まで掘り下げてみたが、この部分は以前に土管を埋設する際に概に掘削されていた。このかく乱層よりタタキ目の入った土器片（古墳時代）1 片を出土した。

今回の調査では、遺構を確認するには至らなかったが、この付近に遺跡が存在していたことが窺われる。

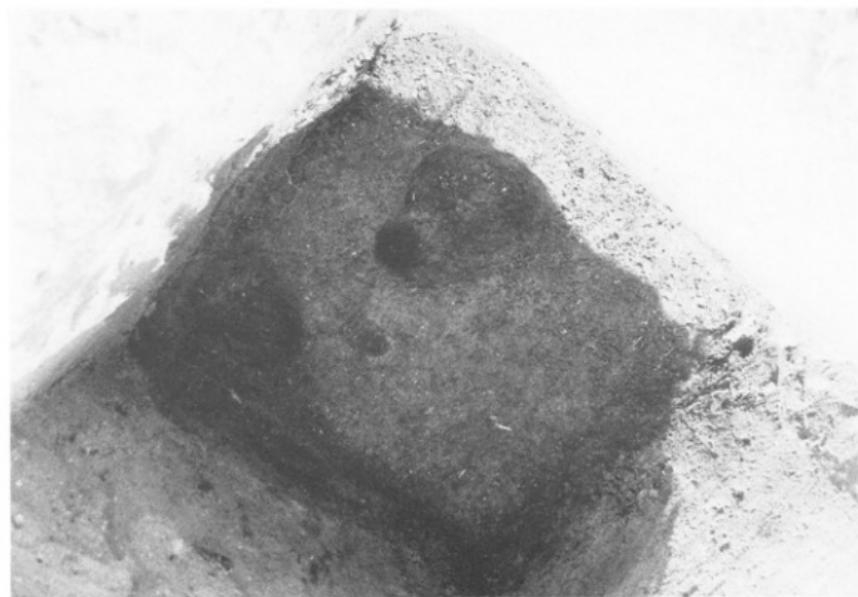


第 2 図 馬場遺跡 挖削位置図

図 版



図版1. 森遺跡（1）トレンチ断面



図版2. 森遺跡（5）トレンチ平面



図版3. 森遺跡(6)須恵器出土状況



図版4. 森遺跡(6)鉄滓出土状況



図版5. 森遺跡(7)第8トレンチ断面



図版6. 森遺跡(7)第7トレンチ平面



図版7. 私部城遺跡第1トレンチ断面



図版8. 馬場遺跡トレンチ断面

